

編集後記

同文書院記念報十三号をお届けする。

本号は特別に力の入った記念すべき号となった。

まず石田寛先生のご講演を収録できたことである。先生が近年力を入れて研究されている地理学者中目覺氏の研究から発展したテーマで、中目氏が校長をしていた北京同学会経営の北京興亜学院からそれが東亜同文会の経営の北京經濟専門学校へと変わる過程とそれぞれの教育制度について詳細なご報告を掲載させていただいた。今回の講演会は当センターが今年度からスタートした大陸にあった高等教育機関研究シリーズの第一弾であり、それにふさわしいご講演であった。とくに東亜同文会経営となり、書院と同じ仲間になった北京經濟専門学校の経緯をその内容を明らかにしていただけたことは、日中関係史や近代教育史の上からも、また東亜同文会史の上からも貴重な成果となった。

ご講演の当日は、北京經濟専門学校の卒業生達も参加され、先生がいわば生き証人としての卒業生へのその場でのインタビューも試みられ、感動的で立体的なご講演になった。先生には原稿化の過程でも情熱を傾けていただき、当事者のわれわれにもそのお気持ち十分伝わってきたほどである。先生には今後とも研究のご発展と大成を祈念させていただきます。

成瀬さよ子氏の報告は、ご本人が昨秋アメリカ有名五大学図書館を訪問し、書院関係図書収蔵経緯と収蔵状況について調査された結果の報告である。書院が世界的にも

注目されてきた一つの証でもある。筆者のヨーロッパ各大学を巡った時にも同様に評価されており、書院がむしろ欧米で評価されてきた状況を知ることができる。

武井義和氏の報告は、昨年名古屋の櫻木家が当センターに寄贈していただいた資料五点について、櫻木氏と当時の上海をめぐる中国と国際関係にまで言及するなど、その周辺まで解明しようとした力作である。武井氏は当センターで資料整理を担当し、今後の研究の発展が見込まれる若き研究者であり、今後の研究の一層の発展を期待したい。

富谷佳美さん白鷺さんの論文は、当センターが東亜同文書院記念基金会の支援を受け、今年度初めて学内の日本人学生および留学生に公募し、最優秀賞に選ばれた論文である。それぞれまだ満たすべき部分はあるが、若い学生の新鮮な視点があり、それをそれぞれの視点で考察しようとした点が高く評価された。この受賞が今後さらに研究が発展する契機になることを期待したい。

まもなく新年度を迎える当センターは、新たにいくつかのプロジェクトが始まる。昨年度の実績をふまえ、さらに前進出来ればと願っている。

二〇〇五年三月二十五日

愛知大学東亜同文書院大学記念センター

運営委員長 藤田佳久